



富岡製糸場総合研究センターだより

No. 4

(2021年6月発行)

富岡製糸場をもっと楽しむための豆知識をお届けします！

糸口を見つける『ホウキ』

東置繭所^{ひがしおきまゆじょ}の展示室に入ると、通路中央右手に大きな古写真が展示されています。これは1872（明治5）年創業当時の繰糸所^{そうしじょ}内の写真です。そこに工女の姿はなく、整然と並ぶフランス式繰糸器、監督役と思われる男性数名を確認することができます。よく見ると、繰糸器に丸い^{ほうき}箒が沢山掛けられていることに気づきます。この丸箒は器械と共に遠くフランスから運ばれました。繰糸工女は、この箒を使い、お湯で煮て柔らかくなった繭面^{まゆづら}を軽く撫^なで、繭糸^{けんし}を挽きだし、生糸^{きいと}を繰^くっていたと思われます。

大正時代になり、それまで繰糸工女が兼業^{けんぎょう}していた繭を煮る作業と糸を繰る作業は分化し、繰糸方法も繭を浮かべて繰る方法から繭を沈めて繰る方法に変わりました。これを転機に、箒は丸い形から細長い形に変わります。そして工女には、常に軽く細やかな箒の扱い方が求められました。当時の作業標語板^はには、「ホウキハカロク」の言葉が掲げられています。

やがて、繭から糸口を見つける箒の操作は、工女の腕から機械のアームへと変わっていくこととなります。現在、繰糸所には1966（昭和41）年頃から設置された自動繰糸機が残されており、機械の両端には繭糸を挽きだす装置を見ることができます。大きな円盤からは放射状にアームが出ていて、その先には「稲穂^{いなほ}」の小さな箒が取り付けられています。

◆ 発行 ◆

富岡市世界遺産観光部 富岡製糸場総合研究センター

